

洞穴に栖む美女たち

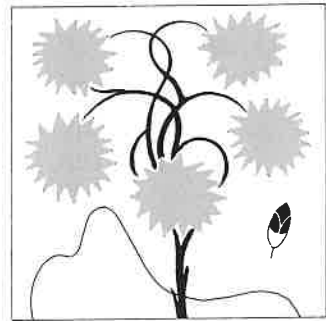
# シーギリヤ・レデイの誘い

日本の山々を見て育っている私たちには、類  
型的な山の姿が脳裏に描かれてるためか、海外  
に出て時に想像を絶する山容に出会っておどろ  
くことがある。

ここスリランカのシーギリヤ・ロックもその  
一つで、山貌魁偉。あたかも核爆発直後のきの  
こ雲のように、巨大なエネルギーを内に秘めた  
姿で、ジャングルの中央に空に向かってほぼ垂

直に切り立っている。周囲の緑を寄せつけない  
かのような、荒々しく赤茶けた肌のこの岩山は、  
その高さ二〇〇メートル。

このおどろきの岩山の頂上に華麗な宮殿を建  
てた狂気な王がいた。その名はカッシャバ。彼  
は父、ダッセナ王を幽閉して王位を奪い、殺害  
したが、腹違いの弟モガラナの復讐を恐れて、  
要害堅固なこの岩山の頂上を己が棲家とした。



しかし、父を殺した罪のおどましさにおびえ、モガラナ来襲の強迫感に責め苛まれる日々だった。

恐れていた日は遂にやってきた。モガラナの軍勢が押し寄せてきたのだ。カッシャバは城を出て迎え撃ったが、彼の乗った象が沼地にはいり、足を取られて動きがとれなくなってしまう。そこを包囲されてカッシャバはあえなく自害して果てた。

爾来幾星霜、周囲をジャングルで囲われ、人を寄せつけないこの岩山、その頂上に宮殿跡が発見されたのは、彼の死後一四〇〇年、イギリスの植民地時代にはいった十九世紀も後半にはいつてからのことである。そして――、  
一八七五年、この岩山を望遠鏡で眺めていた一人のイギリス人が、はるかに洞穴らしいもののあることを見取った。幾度も望見しているうちに、光線の具合で、洞穴の中に岩肌らしいも

のとは違った色彩のようなものに気付き、好奇と探求の念に駆られ、胸躍らせて絶壁をよじ登り、洞穴に辿り着いた。

壁面にすばらしい美女の群像が描かれていた。

これが「シーギリヤ・レダイ」と呼ばれる、スラリンカを代表する芸術作品として、いま全世界に広く知られているものである。

カッシャバ王が殺害した父王ダッセナの鎮魂のために、この美女たちを壁面に描かせたといわれるが、彼女らは当時どういった人物なのだろう。

彼女らはいずれも雲の上に半身をあらわし、天花を持つている姿なので、天人を描いたものようである。しかし、なまなましく個性的な容貌や、身につけた豪華な装飾品を見ると、宮廷に仕えた女たちではなからうか。

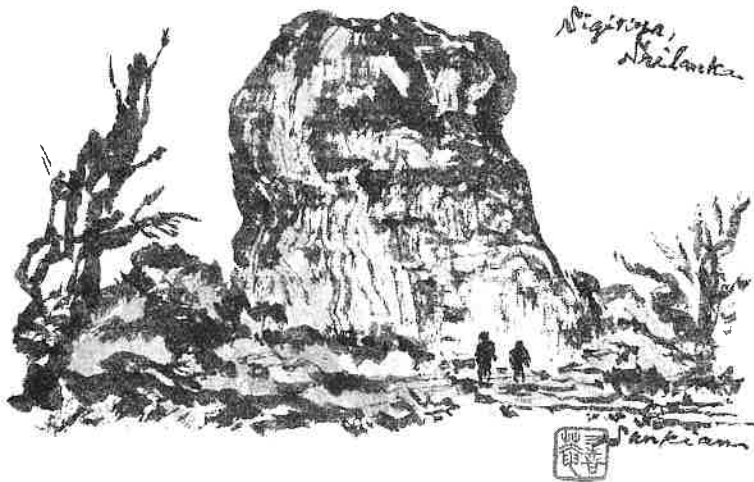
よく見ると、うっすら残っていると

り、いまは二十二体しかないがかつては五百体も描かれていたという。花を捧げ持ち、あるいは花をめぐるこの天女たちの姿は、この国の人びとが夢見てきた極楽世界だったのだろうか。

わざわざこの壁画を見にきた老画伯伊藤三喜庵氏と知り合った私は、誘われるまず、シーギリヤ・ロック登攀に同伴したのだった。

カッシャバ王の築造した城は、シーギリヤ・ロックを本丸としてもろもろの防備施設をととのえた堅固なもので、外周は石垣で囲まれ、南に開けた正面は、「蓮の水路」（ロータス・チャネル）という名の外濠でガードされている。「蓮の水路」と、名前は優美だが、当時は大鰐を放つて敵に備えていたという。

外濠の手前で入場券を求め、橋を渡って中庭にはいると、現地人がびったりくっついてそばを離れない。はじめは「うるさいなあ」と思っ



ていたが、急な石段を一步一步登るにつれ、腕をささえ、腰を押し上げてくれる彼らのヘルプは、老いの身にはありがたいものとなった。

石段を登りはじめて三十分もすると、垂直に切り立った岩壁の底部に着く。そこに、周りを金網で囲んだ鉄製のラセン階段があり、これを登りつめたところが洞穴の入口で、一歩中に足をはこぶと奥の壁面にシーギリヤ・レデイの姿が眼にはいつてくる。

五世紀の作品とはとても思えないほどの色彩、妖艶な姿と神秘的な表情を見つめていると、夢幻の世界に吸い込まれてゆく。

三喜庵画伯が仔細に観察し終るのを待って、洞穴の前を左手に進むとミラー・ウォール（鏡の回廊）にはいる。この壁は真珠のように白く輝き、鏡の役目をしているところからそう名付けられたという。

ここを通り抜け、岩山の北側に進むと広場が

あり、そこに、ライオンの太い両足と大きな爪にはさまれた宮殿の入口がある。かつてはライオンが大きく口を開けてすわっている全体像だったという。階段をのぼってゆくと、ライオンの口中に吸い込まれるような感じになっていたとのこと。

ライオンの大きな爪先から二十メートルほど離れた前方に、大きな建物を思わせる遺構があり、そこに腰をおろし、涼しい風を汗だくになった全身に浴びていると、疲れを忘れて生き返ったような気持ちになった。そこで、

「先生、どうですか。頂上までいってみませんか」

と声をかけると、三喜庵画伯は、「ぼくは疲れたから失礼する。ここでスケッチしてるから、どうぞ」と。

私も疲れてはいたが、何か目に見えないものが私を呼んでいるような気がしてならず、

「それではちよつといつてきます」

と、一人で登攀することにしたが、何しろ急斜面、あえぎあえぎ、どうにか頂上に辿り着いた。

頂上は、面積二ヘクタール近くもあろうか。

王宮、兵舎住居、プールというようなものがあったのだろうか、その形跡が見える。

四方が見渡せるが、聞えてくるのは風の音だけ。暑さを避けて夕方に登ってきたので人影はまばら。手ごろの石に腰をおろし、日のかげりはじめた美しい四囲の景観にみとれて、心地よい涼風に誘われて、ついうつらうつらとしてきた。

のどの乾きを覚え、〃湧水でも……〃と見まわしていると、近くの岩かげに白髪の老人がしゃがんでいた。ちよつと頭を下げて会釈をすると、

「何をさがしているのかな」

と、訊ねるので、「水です。のどが乾きました」と答えると、老人は無言のまま、手招きして歩き出した。ついてゆくと何やら洞穴の入口にきた。中はほとんどまっ暗。

老人が躊躇している私を促すので、私も勇を鼓して暗闇の中を歩いて従った。トンネルのような道出ると、そこには原始的な石造りの小屋があった。老人の住いなのであった。

小さな部屋に通され、椅子代用の石に腰をおろすと、そばの石に、菓子器代りなのであろう、大きな木の葉を五、六枚重ねた上に木の実のようなものが載っている。

老人は、それを指さして、「食べなさい」という。一つつまんで口にいれると、のどの乾きはおさまり、すっかりくつろいだ気分になった。

「どこから来たのかな」

「はい。日本からやってきました」

僧形の私を見て察したのであろう。

「仏陀の遺跡参拝じゃな。それは結構なことじゃ。仏陀は偉大じゃ。この国は、仏陀の教えで救われ、仏陀の教えで栄えるようになったのじゃ。仏陀の教えは今もこの国の人々の心に生きてるのじゃ。」

ところで、仏陀の教えがはいつてくる前のこの国の生い立ち、ご存知かな」

「いいえ、存じません」

「では話して進ぜよう」

老人は孫に昔話を聞かせるような和やいだ表情で語り出した。

「この国はインド大陸の突端からこぼれ落ちた一滴の涙のような小さな島じゃ。昔はインド大陸と地続きじゃったそう。この島の大きさ、知ってるかな」

「はい、日本の北海道をひとまわり小さくしたほどの島と聞いてますから、大体見当はつきます」

「そうか。じゃ続けよう。」

この国の歴史はインドを抜きにして語れんのじゃ。

昔、インドのヴァンガという国に一人の美しい王女が生まれた。五歳になったとき、父王が仙人を招いて占ってもらうと。

『王女さまはライオンと結婚なさいます』

というお託宣じゃった。

おどろき、恐れた父王は、王女を門外に出さぬよう細心の注意を払ったのじゃが――。

才気煥発の王女はいよいよ門の外の世界に好奇心を募らせることになったのじゃ。

王女は成長してますます美しくなった。ある日、父王が鹿狩りに出かけるというんで、王女は父王に連れて行ってほしいと頼んだのじゃが、父王は聞き入れてくれなかった。

すると王女は、前から準備していたんじやな、ボロを身にまとい、髪をほどき、顔に泥を塗り、

乞食同然の姿に変装して、誰にもとがめられずに裏門から出たんじゃ。

あちこち見ながら街を歩いてゆくと、牛車のキヤラバンが休憩しておった。人々の生き生きとした動きを見てみると、これまでの生活ではかつて意識したこともなかった活力が漲ってくるのを覚え、ひとりでに足が動きキヤラバンの中にもぐり込んだのじゃ。誰一人、あやしむものもなかったの、そのままキヤラバンに加わっていつしよに出発したんじゃが、ララーという森にはいったとき、たいへんなことが起きたんじゃ。

突如としてライオンがあらわれ、大騒ぎとなり、人々はくもの子を散らしたように逃げ失せた。

ただ一人逃げ遅れた王女の前にライオンがやってきた。しかし不思議なことにライオンは王女に危害を加える素振りはみせなかった。それ



どころか、王女の顔を大きな舌で舐めずりまわしたのじゃ。すると天性のすばらしい美貌が、泥まみれの中からあらわれたんじゃ。

ライオンは美しい王女をみて、食欲などは消え失せ、胸に燃える恋の炎に気付いたようじゃな。

ライオンは王女を洞窟に連れ込み、食事を与え、どこからか衣服を持つてきては着せ、水浴にも連れてゆくといった風に、忠実な侍女のようにかしづいたのじゃ。

ライオンは心から王女に恋い焦がれたのじゃ。こうなつてはライオンの情が通じないわけではない。いつしか王女の胸にも恋情が募りライオンと王女は結ばれ、洞窟の中でめおとの生活にはいったのじゃ」

「ちよつとお聞きしていいですか」

「なんじゃ」

「ライオンというのは、本当のライオンのこ

とですか。それとも、野性的な逞しい男性のことですか。それとも、部族の名前のことですか」  
「そういう詮索はあとまわしじゃ。まずわしの話を聞かっしゃれ」

「はい、すみませんでした」

「どこまで話したんじゃったかな。ああ、そう、そう。めおととなつたライオンと王女の間にも双児が生まれたんじゃよ。男の児と女の児じゃ。男の児はシンハバーフ、女の児はシンハシーワリーという名前じゃった。

シンハというのはライオンのことじゃ。

二人の子供は母親同様、人間の姿をしていたので、母親は子供たちを人間に近付けまいと常々心を砕いたんじゃが、そうなるとうますます人間の世界を垣間見たくなるのが人情で、子供とて同じことじゃ。ことに兄のシンハバーフは、人間の生活に強い関心を示すようになった。



ある時、山道に牛車のキャラバンがとまっていたので、彼はそれに近付き、つぶさに観察すると、自分たちの生活と全く違っていることに気付いて、彼は家に帰るなり母親にたずねたんじゃないよ。

「私たちはなぜ洞窟で暮してるの？」

「お父さんはどうして普通と変っているの？」

「なぜ人間らしい普通の生活をしないの？」

矢継ぎばやの息子の質問に母は適切に答えられなかった。

シンハバーフは成長するに従い、いよいよ洞窟の生活を嫌い、父を疎ましく思うようになって。そして、母に人間の生活にもどろうと迫るのだが、母は首をたてにふらなかつたんじゃない。シンハバーフは、「お母さんはお父さんを愛しているから人間の生活にもどれないんだ」と感じ、ついに父を殺す計画を樹てたんじゃない。

秘かに周到な準備をととのえ、父の帰りを岩

かげで待ち伏せし、弓矢を放って射とめたのじや。かわいそうにライオンは仆れ、やがて絶命した。これを知った母は半狂乱になり、夫ライオンの亡き骸に泣きくずれたのじやが、シヨックのあまり自ら命を断つてしもうた。まことにむごい話じや。

そこでシンハバーフは妹のシンハシーワリーを連れて人里にくだるんじゃない。とある村にはいて、村人と話をする、村人たちは二人の話を聞いて、その母がヴァンガの王女であることを知っていたので、二人を王の許に連れていった。

王は二人をたいへんかわいがってくれたのじやが、やはりいざらいこともあつたじやろうて、シンハバーフは妹と供の者を連れて、ヴァンガの国を去り、シンハプラという町を造って、そこを治めたのじやが、妹のシンハシーワリーを妃としたて、三十二人の子供をもうけたという

ことじゃ。さすがライオンの子供だけあるのう。

その長男がヴィジャヤというのだが、これがまた手に負えない乱暴者でのう。

ヴィジャヤは成長するにしたがい、暴力はふるう、盗みはする、女をかどわかす、たいへんな悪党になったんじや。これでは父親は臣下に示しがつかなくなる。そこで父親は涙を呑んで、七百人の供の者をつけ、船を仕立てて国外に追放したんじや。

その船の辿り着いたのがこの島でのう。インドに近い北西部のタンメンナー（注 いまのマナー）に上陸したんじや。一同は揺れる船旅を続けてきたのじやて、陸にあがつて揺れ動かぬ大地に感動して大地に手をついたのじや。すると手が赤銅色に変わったそうな。この島をタンパンニというようになったのはそのためじや

「タンパンニですか」

「そうじや。赤銅色の手ということじや」

「また不思議なことに、ヴィジャヤの一同が上陸した日は、仏陀の涅槃の日じやったそうな」

「すると二五〇〇年前のことですね。そのころから仏教がこの国に伝わるご縁があつたんですね」

「そうじやなア。一同、長い船旅で疲れ、海岸で休んだが、困つたことに水がない。そこへ一匹の犬がやって来た。

ヴィジャヤは、犬がいるからには人間がいるにちがいない。人間がおれば水があるはずだと判断し、二名の者をして犬のあとをつけさせた。三人は森にはいったが、いつまで経つても戻つてこない。

不審に思つたヴィジャヤは、屈強な部下数名を連れて、注意深く森にはいつてみると、小さな沼があり、その近くで一人の若い娘が糸取車をまわして糸を紡いでいた。

『わしの部下がここにきたはずだ。どこにいる？』

と、ヴィジャヤは詰問するように入った。

女は沼の方を指差し、両手で水を汲みあげて飲む仕草をして、『水を飲め』と、すすめる風だった。

ヴィジャヤは、女の態度に不自然なものを感じ、周囲に目くばりをしながら沼の水際に足をはこんだ。すると、沼にはいつた足跡はあるが、沼から出てきた足跡がない。

『これは毒水の沼だ。あの女が毒を投げ入れたに相違ない』

そう直感したヴィジャヤは女のところへ引返し、長い髪の毛を左手でひっぱり、

『わしの部下を殺したな。なぜ殺した。言わぬと殺すぞ』

と、右手の刀を女ののど元に突きつけた。

女はふるえあがって、毒殺したことを自白し

て、助けを乞うた。

この女はヤクシヤ（夜叉）と呼ばれる悪鬼の一族の主領の娘クヴェニーだった。

クヴェニーは毒薬を隠し持つて、侵入者を毒殺する秘技をもつて一族の安泰をはかっていたんじやが、ヴィジャヤの威嚇に屈し、ヴィジャヤに忠誠を誓い、ヤクシヤの一族を罠にかけて毒殺してしまふんじや。

こうして原住民のヤクシヤを滅ぼしたヴィジャヤは、クヴェニーを妻に迎え、ジーワハッタという名の男の児と、ジーサーラーという女の児をもうけるんじや。

この島を平定したヴィジャヤは、五、六年経つと、王としての貫録をつけるため、インドに渡り、身分の高い女性を連れてきて妃にするんじや。かわいそうにクヴェニーと二人の子供はいたたまず家出をして山にこもるんじやが、クヴェニーは裏切の罪で殺されてしまふのじ

や。

いやはや、なんとも救いがたい話じゃ。

このヴェジャヤがシンハラ王国を建設するんじゃない」

「シンハラというのはライオンのことでしたね。シンハラというのは……」

「ライオンを殺した者という意味じゃ。」

聞いてのとおりの話じゃ。とても人間の仕業とは思えぬおぞましいことばかりじゃ。

このヴェジャヤの子孫が人間として品位を高め、この島の自然のように美しく豊かな文化を築きあげるようになったのは、インドから、あのアショーカ大王の息子マヒンダがミヒンタレーにやってきて仏陀の教えを伝えてからじゃ」

「それはいつごろのことですか」

「紀元前、二五〇年ごろのことじゃ。この時は、王と臣下、住民たちが七日間で八五〇〇人も仏教徒となり、あつという間に仏教は全島に



ひろまったということじゃ。

仏陀はシンハラ王国の人民の救い主であり、繁栄のもととなる心の在り方を教えてくれたお方じゃ。だからこの国の人々は仏陀の教えに深く帰依し、仏陀の遺跡を大事に保護し、恭敬礼拝を怠らないのじゃ。

このことをよく頭にいれて仏陀の遺跡を巡礼なされや」

ここまで話すると、老人は長い煙管を取り出して煙草に火をつけ、腹いっぱい吸込んで、フウッと、紫煙をくゆらせた。

「話が終つたのだな」と思ったとき、ふと私は中国の古典『神仙伝』にある次の話を思い出した。

晋の時代王質という人が山へ薪を採りに出かけたところ、岩屋で四人の童子が碁を打っていた。おもしろそうなので観戦していると、一人の童子が棗の実を一つくれた。それを口に含ん

でいたら少しも空腹を感じなかったの、ずっと観戦していた。

やっと一局終つたので、「どれ、帰ろうか」と、ふと、腰に差した斧を見ると、不思議なことに、斧はすつから錆つき、柄は腐っていた。

「変なこともあるものだ」と思いながら家に帰ってみると、すでに数十年も経っており、近所の者たちはみな死に絶えていたということだつた。

もとより私の腰に斧のあろうはずはないのだが、腰に手をやり、「斧は」と思ったとき、私の右手には斧ならぬミニ・カメラが握られていた。カメラのデータを見ると、「九二・一〇・二八」とあった。タイム・スリップはしてなかった。それでも何か安心ならず、急いで階段をおりて、例のライオンの広場までくると、三喜庵画伯がおいしそうに煙草を吸っていた。

「どうも、おそくなりました」

「いや、いや、いまスケッチを描きおえたところですよ。こんな風にできました」

それは、神秘感を漂わせる岩山の風景だった。

「これはすばらしいですね。私はいま、この絵の奥にひそむ夢幻の世界に遊んできたんです。あとでお話いたします」

「ぜひ聞かしてもらいましょう。もう間もなく日が落ちますから、まずは早く帰りましょう」

三喜庵画伯とともにミラー・ウォールの回廊を戻り、洞穴の前でシーギリヤ・レデイに別れの挨拶をし、夢ともうつつともつかぬ思いでラセン階段をグルグルまわりながら岩山をくだった。

